

## 『細雪』の表現

—発話文に見られる「——」（ダッシュ）と「……」（リーダー）の用法—

安井 寿 枝

はじめに

谷崎潤一郎は文章を書く上で、その文面から与える音楽的效果と視覚的效果を非常に意識していたといえる。それは、『文章読本』の中で「文章の**音楽的效果と視覚的效果**とを全然無視してよいはずがありません」（※ゴシックは原文のママ 以下同じ）と述べていることから窺える。音楽的效果は「**音調の美**」であり、「**音読の習慣がすたれかけた今日においても、全然声と云うものを想像しないで読むことは出来ない**」とし、文章には音読したときの読みやすさが必要であるとする。また、視覚的效果は「**字面**」として、文字を漢字で書くか、ひらがなで書くか、カタカナで書くかによって与える印象が違うことを考慮しなければならないなどと述べる。この『文章読本』は『細雪』以前のものであるから、『細雪』を書く上でもこのような効果を意識していたと考えてよいであろう。

本稿では「『細雪』の表現」と題して、発話文に見られる「——」（ダッシュ）と「……」（リーダー）<sup>1</sup>の用法について考察を進めたい。「——」（ダッシュ）と「……」（リーダー）は、樺島忠夫（1977）で「表意符号」と分類されるように意味のある符号である。樺島（1977）では、「——」（ダッシュ）は「話題の転換、説明、言いかえを行うとき、語句の言いさし、「から～まで」の意に用いる。また無言を示す」とされ、「……」（リーダー）は「語句の言い

1 「ダッシュ」と「リーダー」という名称は、便宜上用いたもので、読み方に意図はないものである。また、その表記に三字分を用いるが、これは全集の表記を参考にしたものである。

太田紘子（1997）では、『あひゞき』に見られる「……」（リーダー）の点の数について「点線の点の数は三～十個（二～五字分）と様々である」と述べられる。

さし、無言」であるとされる。また、音読する場合、読み手は「——」（ダッシュ）と「…………」（リーダー）の部分に「間」を置くため、これは音楽的効果となる。つまり、「——」（ダッシュ）と「…………」（リーダー）は、音楽的効果と視覚的効果を併せ持つものであるといえよう。よって、その使用を見ることにより、音楽的効果と視覚的効果を踏まえた、谷崎の細やかな表現を知ることができるのである。なお、本稿で『細雪』の引用をするにあたっては、新字体を用いるため中央公論社発行の『日本の文学24谷崎潤一郎（二）』（1966年初版）を用いる<sup>2</sup> こととする。

## 1 小説の中に見る「——」（ダッシュ）と「…………」（リーダー）

従来から様々な作品において、その中に見られる「——」（ダッシュ）と「…………」（リーダー）についても述べられてきた。杉本つとむ（1967）では、二葉亭四迷の『あひゞき』に見られる「——」（ダッシュ）や「…………」（リーダー）の使用について、「ロシア語文から影響されているのであろう」と述べられ、中島国彦（1974）では、梶井基次郎の『檸檬』に見られる「——」（ダッシュ）の使用について、次のように述べる。

この使用は別にこの作品に限らず梶井の他の作品にもあるし、『檸檬』においてもその使われ方、効果は種々だ。「二銭や三銭のもの——と云つて贅沢なもの」というような屈折を示す場合だけではない。が、少なくともそうした場所にある空白、ポーズ（休止）があることだけは確かだろう。それはちょうど人間の呼吸で、呼気から吸気、吸気から呼気へと移る時のあの一瞬の空白に似ている。

中島（1974）の指摘を受け、増田修（1999）では『檸檬』の「——」（ダッ

2 表記については『日本の文学23谷崎潤一郎(一)』の「編集だより」に次のように書かれてある。

本巻は「谷崎潤一郎全集」（中央公論社刊）を底本とし、著者の校閲を経て、新かなづかい、新字体に改めました。ただし、佛（仏）圓（円）壓（圧）廣（広）歛（欠）舊（旧）藝（芸）などは著者の意向により旧字体のままにしました。また、その他谷崎の随筆などを参考にするにあたっては、中央公論社発行の『谷崎潤一郎全集』（1966年－1968年初版）を用い、引用にあたっては新かな・新字体に改めた。

シュ)の使用について、「ある事柄を描写し叙述する時に、ふと別の視点から見た言葉を付加したり、反省的な思考が働いたり、逆の見方を述べたりする、このような時に「——」が登場する」と述べられる。

佐藤嗣男(1982)では、芥川龍之介の作品に見られる「——」(ダッシュ)と「……………」(リーダー)について、次のように述べられる。

芥川は時空間的にも表現上不可欠な符号として使いこなしている。ダッシュの直線的な緊張感と点線の間断的な余情感を、その視覚的効果と無音の音による聴覚的効果に於て、リズムカルに組み合わせることで、いわば文章上の身振り言語として、文字の間に溶け込ませている。

(※傍点は原文のママ)

鷺只雄(1987)では、中島敦の作品に見られるオノマトペとともに、「——」(ダッシュ)と「……………」(リーダー)の使用数が作品ごとに表にまとめられ、その使用率については次のように述べられる。

「李陵」や「光と風と夢」などの場合は(それぞれ二二%、一八%)適度と思われるが、初期の「斗南先生」(四四%)、「虎狩」(六九%)、「狼疾記」(四五%)は非常に多く、ために文章が中断されて煩わしく、読みにくくなっていて、この点も格調の高さ、文脈の正しさと密接な関連があろう。

これらの先行研究では、作家それぞれの特徴が述べられるが、樺島(1990)では、吉川英治の作品に見られる「……………」(リーダー)の使用を、「その素材としての言葉よりも、言葉や、「……」「?」「!」などの表記符号を通して描くイメージの方に、大きく重点がかかっているものであろう」と述べ、谷崎潤一郎の文章と比較し、次のように述べている。

吉川英治は、文章を通して描き出される場面に重点を置く作家、谷崎潤一郎は、言葉の特性を生かし、言葉そのものが作り出す効果に重点を置く作家とは言えないだろうか。

(※傍点は原文のママ)

谷崎が、「言葉の特性を生かし、言葉そのものが作り出す効果に重点を置く作家」であるというのは、樺島(1990)にも引用されるように、「文章の音楽的効果と視覚的効果」(『文章読本』)を重視するということである。

以上あげた先行研究では、作品全体または作家の表現の特徴をあげることを主としているため、「——」(ダッシュ)や「……………」(リーダー)そのもの

に注目し、その使用場面を考慮した考察はなされていない。そこで、本稿では、作品を谷崎の作品の中で最も長い小説である『細雪』に絞り、その中でも四姉妹の発話を中心に、「——」（ダッシュ）と「…………」（リーダー）の用法を場面とともに考察する。

## 2 「——」（ダッシュ）の用法

### 2-1 言いさし

『細雪』内で最初に見られる「——」（ダッシュ）の用法は、その書き出し部分である。それは、四姉妹の次女・幸子の発話に見られる。

（上巻・一）

「こいさん、頼むわ。——」

鏡の中で、廊下からうしろへは行って来た妙子を見ると、自分で襟を塗りかけていた刷毛を渡して、そちらは見ずに、眼の前に映っている長襦袢姿の、抜き衣紋の顔を他人の顔のように見据えながら、

「雪子ちゃん下で何してる」

と、幸子はきいた。

（※ルビは原文のママ 以下同じ）

これは、四姉妹の長女を除いた幸子・雪子・妙子が、音楽会に行くための準備をしている場面で、『細雪』はこの幸子の発話から始まる。「——」（ダッシュ）は、樺島（1977）では「話題の転換、説明、言いかえを行うとき、語句の言いさし、「から～まで」の意に用いる。また無言を示す」とされるが、ここで用いられる「——」（ダッシュ）は、「無言」よりも、「言いさし」を表していると考えられる。

幸子の「こいさん、頼むわ。——」の発話の後には、地の文でその場の説明がなされるが、その説明は小説という映像のない世界には必要不可欠なものであり、そこに「間」というものは存在しない。つまり、幸子の「こいさん、頼むわ。——」の「頼むわ」の部分で、幸子は妙子に「刷毛を渡して」いるのであり、次の自分の顔を「他人のように見据えながら」、「雪子ちゃん下で何してる」と尋ねるのであって、発話と地の文が同時に行われているのである。そこに、「——」（ダッシュ）が用いられる。

このような「——」（ダッシュ）の使用は、地の文を挟まず、発話のみで描かれる場面にも見ることができる。

（上巻・一）

「井谷<sup>いたに</sup>さんが持って来やはった話やねんけどな、——」

「そう、——」

「サラリーマンやねん、MB 化学工業会社の社員やて。——」

「なんぼぐらいもろてるのん」

「月給が百七十八圓、ボーナス入れて二百五十圓ぐらいになるねん」

（中巻・三十五）

「もうその話止め！」

「うち、それぐらいは平気やったけど、とうとうえらいもん見てしもうてん。——」

「止め！止めんかいな！」

「当分牛肉の鹿<sup>か</sup>の子<sup>こ</sup>の<sup>こ</sup>とこ——」

「止めえな、こいさん」

と、雪子が叱った。

上巻・一は書き出しと同じ場面で、幸子と妙子が、雪子の見合い相手について話す場面である。幸子の発話から始まるが、妙子の「そう」は相槌であり、これらの会話に「——」（ダッシュ）が入ることによって、会話に流れが表現される。また、中巻・三十五は、妙子が、自分の二人目の恋人である板倉の手術現場を目撃し、その場면을幸子や雪子、幸子の夫である貞之助に説明する場面で、幸子は聞くに堪えず、それを制止しようとする会話部分である。この中巻・三十五も上巻・一と同様に会話に流れが表現されるが、上巻・一よりも妙子の発話と幸子の制止しようとすることばが、「——」（ダッシュ）の部分で重なっているように感じられる。

また、このような言いさしの「——」（ダッシュ）は、四姉妹に限らずその他の登場人物にも見られ、四姉妹のみの特徴ではない。次は、四姉妹の母親の法事で集まった人々の会話である。

（下巻・十）

「何ぞええことがおまんのんか」

「僕、今月中に北支へ行きますねん。実は妹が天津テンシンのダンスホールに出て  
ましたら、軍部に見込まれてスパイになりましたん。——」

「ほうお、——」

「そして今では支那浪人の奥さんになりおって、えらい羽振りがよくて、  
時々国もとへ千圓二千圓と送って来まんねん。——」

「ハテナ、僕にもそういう妹がないもんかしらん」

この会話にある「ほうお」も、上巻・一の妙子の「そう」と同じく相槌であり、  
幸子と妙子の会話のような流れが表現される。

この言いさしの「——」（ダッシュ）は、先の例では発話の文末に見られ  
るが、この文末に見られる「——」（ダッシュ）とセットになるような形で、  
発話の文頭に「——」（ダッシュ）が見られる例がある。

（中巻・二十七）

「そんなら、中姉なかあんちゃん、——」

と妙子が、傘かさを開いて柄えをまっすぐに、右の手に持ちながら云った。

「——今のとこ、もう一遍弾いてみて欲しい」

「そんなこと云わんと、初めからやりなさい」

貞之助が云う尾に附いて悦子も云った。

「そうやわ、こいちゃん、姉ちゃんの見せたげて、——」

「二編舞うたら、こいちゃんもうへとへとやわ」

「まあ、稽古や思うて、もう一遍初めから舞い。——」

と、幸子も云った。

「——あたしかて板の間に坐ってたら、冷えて叶わんけど」

「御寮人様、懐炉ごりょうにんさん かいろを入れて参りましょうか」

と、お春が云った。

「——腰の所へお当てになりましたら、お違いになるやろうと存じます  
が」

これは、山村舞の会に出演することになった、四姉妹の末の妹・妙子の稽古の  
様子である。洋間で稽古をしていると、東京から帰った三女の雪子がちょうど  
到着したため、稽古が中断し、妙子は中断したその続きから舞おうとする。そ  
の時の発話の文末と文頭に「——」（ダッシュ）が用いられるが、その間に

ある地の文は妙子の姿を説明したものであり、地の文によって発話が途切れないように「——」（ダッシュ）が用いられる。この「——」（ダッシュ）の使用は、同じ場面の幸子の発話にも見られる。引用部最後の女中・お春の発話は、文末の「——」（ダッシュ）がなく文頭のみで使用するが、文頭のみの場合も、地の文によって先の発話との流れが途切れないように「——」（ダッシュ）が用いられていると考えられる。

このような、発話の文末や文頭にくる「——」（ダッシュ）は、「——」（ダッシュ）の例としては最も多く、これらの使用が「——」（ダッシュ）の大きな特徴である。

## 2-2 間

樺島（1977）では、「——」（ダッシュ）の意味として「無言を示す」ものがある。小学館発行『日本国語大辞典』（2001年発行・以下『日本国語大辞典』）によれば「無言」とは、「物を言わないこと。口をきかないこと。沈黙を守ること」であるとされる。本稿では、「無言」を「口をきかないこと」とであると考え、「——」（ダッシュ）のみで「口をきかないこと」を表すもの、例えば、

A：「ちょっと」

B：「——」

A：「聞ってる？」

B：「——」

A：「何か言ってよ！」

のBの発話のようなものを「無言」と考えたが、『細雪』内にそのような例は見当たらなかった。『細雪』内では、「無言」を表すには「……」（リーダー）を用いるのである。しかし、発話内に見られる「——」（ダッシュ）には、言いさしとは別に「——」（ダッシュ）の部分に「間」があるものがあり、それが次のような例である。

（上巻・一）

「これやったらまあ平凡や。——いや、いくらかええ男の方かしらん。

——けどどう見てもサラリーマンタイプやなあ」

雪子の見合い相手の写真を見て感想を述べる妙子の発話の文中に「——」

(ダッシュ)が見られるが、この使用はことばが途中で途切れるような言いさしではなく、口をきかないことを表す無言でもない。このような例を本稿では「間」とする。『日本国語大辞典』には、「間」の説明として「継続していたものが途切れたり中断したりする時間。絶え間」があげられるが、本稿で用いる「間」もこれに値すると考える。つまり、本稿で述べる「間」とは、言いさしとは別に、「継続している会話が途切れた部分」を指し、それが上記の上巻・一の例となる。

またこの発話から妙子は、その写真を見た瞬間「まあ平凡」と判断するが、この「——」(ダッシュ)の間に「ええ男の方」と考え直し、再び「——」(ダッシュ)の間に「ええ男の方」ではあるが「平凡」と最終判断を下していることが分かる。つまり、この「——」(ダッシュ)は「間」を表すと同時に、妙子の思考の変化を表しているといえよう。

このような「——」(ダッシュ)の用法には、発話者の動きを予想させるものもある。次は、幸子の締めた帯がキュウキュウと鳴るので、音楽会には不向きと色々な帯を試す場面である。妙子に選ばれた「観世水かんぜみずの模様」の帯を締めた幸子は次のような発話をするが、「——」(ダッシュ)の部分では、幸子がわざと呼吸をしているようである。

(上巻・五)

「何でて、よう聞いててごらん。——ほれ、これかてキュウ、キュウ云うてるがな」

そう云って幸子は、わざと呼吸をして帯のお腹に当るところを鳴らしてみせた。

このように、「間」としての「——」(ダッシュ)は、発話の文中にあり、発話者の思考の変化や行動を表しているといえる。

### 2-3 地の文に見られる発話を表す用法

発話文に見られる用法としては先に述べた「言いさし」と「間」が上げられるが、四姉妹の発話を見てゆくと、地の文に発話が含まれる例があり、それを表す方法として「——」(ダッシュ)が用いられている。寺田透(1959)では、「谷崎の文章構成法の特徴」として「地の文から登場人物の言葉への移行



のきわめてなだらかで自然なこと、そのなだらかさ自然さを保つために、引用であることを示す符号」を用いていることがあげられるが、これが地の文に見られる「——」（ダッシュ）である。次に、その例をあげる。

（上巻・三）

雪子に云わせれば、新聞に間違った記事が出たのは私の不運としてあきらめるより仕方がない、（中略）兄さんのすることは万里理屈<sup>りくつ</sup>詰めで、情味がない、第一これほどのことを、最も利害関係の深い私に一言の相談もせずに実行するとは専横過ぎる、——というのであったが、妙子は妙子で、（中略）兄さんはそういう場合にお金を吝<sup>お</sup>しむからいけない、——と、これはその時分から云うことがませていた。

『細雪』の地の文には、しばしばこのように登場人物の発話が、地の文に引用される例が見られる。上の例では、雪子と妙子の発話の引用が確認され、発話の終わりに「——」（ダッシュ）が用いられる。

その他、四姉妹も含め登場人物が詠んだ歌や手紙文なども、地の文に「——」（ダッシュ）を用い表される。これらの用法は発話文を表す用法に酷似しているが、この場合改行されるという特徴が見られる。

（上巻・十九）

女学校時代に自分もひとしきり作歌に凝ったことのある幸子は、近頃また、夫の影響で、ノートブックの端などへ思いつくままを書き溜めたりして、ひとり楽しんでいたのであったが、それを読むとにわかに興が動いて、先日、平安神宮で詠みさしたまま想が纏まらないでしまったものを、しばらく考えて次のように纏めてみた。——

平安神宮にて花の散るを見て  
ゆく春の名残り惜しさに散る花を  
袂のうちに秘<sup>ひ</sup>めておかまし

（中巻・十八）

その内容はまことに思いがけないもので、彼女が読んだ全文は左のごとくであった。——

拝啓

突然かような手紙を差上げる失礼をお許し下さい。姉上がこの手紙を御覧になって驚かれることは分っているのですが、それでも僕はこの機会を逃す<sup>のが</sup>ことができないのです。

上巻・十九は自分の夫である貞之助の歌を見た幸子が詠んだ歌、中巻・十八は妙子の恋人である奥畑から幸子に届いた手紙であり、どちらも引用の前に「——」（ダッシュ）が用いられる。

#### 2-4 鉤括弧で括られた発話には見られない用法

2-3では、地の文に見られる登場人物の発話や手紙を表す「——」（ダッシュ）の用法をあげたが、地の文に含まれる発話部分に見られる「——」（ダッシュ）には、改行され地の文とは別に鉤括弧で括られた発話には見られない用法が見られる。それが、樺島（1977）で説明される話題の「説明、言い換え」を表す「——」（ダッシュ）である。ここに、船場言葉の「こいさん」について、地の文で説明される場面（上巻・三）と、鉤括弧で括られた発話部分で説明される場面（下巻・三十）をあげる。

（上巻・三）

幸子もまんざら知らない顔ではなかったのですが、とにかく面会してみると、突然で失礼だとは思ったけれども折り入って御諒解を願いたいことがありましてという前置きの後で、先年自分たちの取った手段は過激であったとは思いますが、決して一時の浮気心から出た行為ではなかったこと、あの時自分たちは引き離されてしまったが、自分<sup>こいと</sup>はこいさん（——「こいさん」とは「小娘さん」の義で、大阪の家庭で末の娘を呼ぶのに用いる普通名詞であるが、その時奥畑は妙子のことを「こいさん」と云うばかりか、幸子<sup>こいと</sup>のことを「姉さん」と呼んだ）との間に、父兄の諒解を得られるまで何年でも待とうという固い約束をした（略）

（下巻・三十）

「光代さん、お話の最中ですが、こちらのお嬢さんは妙子さんとおっしゃるんだと伺いましたが、『こいさん』とおっしゃいますのは？」

「まあ、御牧さんは京都人の癖に『こいさん』を御存じないんですか」

「『こいさん』をいう言葉は、大阪だけのようでございますね。京都ではあんまり使わないようでございますが」

と、幸子が云った。

上巻・三では、妙子の恋人である奥畑の発話が地の文に含まれ、ここで「こいさん」の説明を行うのに、括弧と「——」（ダッシュ）が用いられる。括弧で区切られることから、作者の注のような印象を受けるが、その他の場面では括弧を用いず、「——」（ダッシュ）のみで説明や言い換えを行う部分も見られる。一方、発話文である下巻・三十では、上巻・三と同じように、「こいさん」ということばが京都では用いられなかったことを説明するにも、先のように「——」（ダッシュ）で発話内に説明を加えるようなことはせず、登場人物の発話の流れによってそれらを表す方法がとられる。このような「説明・言い換え」を表す「——」（ダッシュ）は、鍵括弧で括られ改行された発話には見られず、地の文にのみ見られる用法である。

### 3 「……」（リーダー）の用法

#### 3-1 言いよどみ

『細雪』内の四姉妹の発話中に、「……」（リーダー）が初めて確認されるのは、次の場面である。

（上巻・四）

「いやとは云うてえへんけど、……ま、昨日来て今日明日のうちに見合いしょうて、そない軽々しゅう扱われとうないのんが、ほんとうのとこやないやろか。何せはっきり云うてくれへんさかい分らへんねんけど、もうちょっとその人のこと調べてからでもええやないか云うて、何ぼすめても行こうということ云うてくれへんねん」

「そんなら、井谷さんにどない云うのん」

「どない云おう。——何とかちゃんとした理由云わなんたら、どこまでも追究されるにきまったあるし、……今度のことはどうなるにしても、あの人怒らしてしもて、この先世話して貰えんようになったら難儀やし、……なあ、こいさん、今日明日でのうても、四五日うちに行ってくれる

ように、一遍こいさんからも云うてみてえな」

これは、先に引用した上巻・一の雪子の見合いの話を、幸子が妙子に相談する場面の続きである。その見合いに雪子が乗り気ではないため、それを促すよう妙子に相談するとき、初めて「……………」(リーダー)が用いられる。ここでは、同じく「———」(ダッシュ)も見られるが、この「———」(ダッシュ)は「2-2 間」で触れた「間」を表すものであろう。

ここで見られる「……………」(リーダー)は、文中にあり「間」を表すという点では、「———」(ダッシュ)の用法である「間」に似ていよう。しかし、この「間」には、ことばをあえて続けなかったような様子が窺える。例えば、「いやとは云うてえへんけど、……………ま、昨日来て今日明日のうちに見合いしようて」には、「云うてえへんけど」の後に何かことばが続くと予想されるが、そのことばの代わりに「……………」(リーダー)を置き、「ま、昨日来て」と話を転換させてしまう。「云うてえへんけど」の後に続くことばは明記せず、「……………」(リーダー)としてそこに「間」を表わし、後に続くことばを読み手に推測させている。このような用法は、「———」(ダッシュ)に見られる「間」とは異なり、ことばが続くという点では「言いさし」と類似するが、その続きは明記されないため、これを「言いよどみ」の用法とする。

先の上巻・四の幸子の例では、「……………」(リーダー)によって幸子の、雪子の見合いに対する悩みが表されるであろう。このように、「言いよどみ」には発話者の悩みや迷いが現れる。また、あえてはっきりと言わないことで発話対象への配慮が窺える使用もある。それが次の例である。次は幸子に雪子を見合いに促すように頼まれた妙子が、雪子に見合いの話をする場面である。

(上巻・六)

「せっかく云うて来てくれはったのんに、会うのんいやや云うたら中姉ちゃんが難儀するがな」

「そうかて、そない急<sup>せ</sup>かんならん理由あるやろか」

「ま、きっとそんなこっちゃないやろか云うててんけど、……………」

そこへどたどたと<sup>3</sup> 足音がして、

3 作品では縦書きで二文字の繰り返しを示す「く」が用いられるが、「く」を表す横書きでの表記が確立していないため、「どたどたと」とくり返しを用いず表記する。

「あ、ハンカチ忘れたわ、誰か持って来て。ハンカチハンカチ」  
と、はみ出した長襦袢の袖をそろえながら、幸子がかどぐち門口へ飛んで出た。

(※脚注は本稿筆者のもの)

ここで見られる「ま、きっとそんなこっちゃないやろか云うててんけど、……」は妙子の発話で、「けど」の後には「会うたらええやないの」などということばが続くと予想される。それをあえて言わず、「……」(リーダー)とすることで、妙子の雪子に対する配慮が窺えるのではないだろうか。また、この「……」(リーダー)の使用の後には地の文が続くが、「言いさし」の「——」(ダッシュ)と異なる点は、この「……」(リーダー)の部分には少し長い「間」があるということである。もし、妙子の発話が幸子の足音で消されるのであれば、「……」(リーダー)は「——」(ダッシュ)に変わり、地の文の段落が変わることはないであろう。以下同じ場面の妙子の発話の「……」(リーダー)を「——」(ダッシュ)に変え、一部を記述する。

「ま、きっとそんなこっちゃないやろか云うててんけど、——」  
そこへどたどたと足音がして、

「あ、ハンカチ忘れたわ、誰か持って来て。ハンカチハンカチ」  
このように「……」(リーダー)を「——」(ダッシュ)に変えてみると、妙子の発話が幸子の足音で消されたような記述になる。これが、「言いさし」の「——」(ダッシュ)と「言いよどみ」の「……」(リーダー)の違いである。

そして、このような「言いよどみ」は、地の文に含まれる会話にも見られる。

(上巻・十三)

瀬越さんはあのお年ですけれども、結婚の経験がおありにならないものですから、初心のお方らしいところがあって、この間は何だかあが上ってしまってそんなことをしゃべったのやら覚えてない、それにお嬢さんもああいう内気なお方で、……いえ、その内気は結構なのですけれども、あの時は何分初対面で、遠慮しておいでになったよだから、もう一度お目にかかって、お互いにもっと打ち解けて口を利いてみたい、というようなわけなのでございまして、……と、そう云ってから、それでご承諾願えるのでしたら、ホテルや料理屋も目につきやすいから、むさくるしい所ではあるけ

れども、阪急岡本<sup>おかもと</sup>の私の住居の方へでも来ていただいて、お会いになったらいかがであろうか、先方はこの次の日曜日あたりを望んでおられるのですが、という話なのである。

これは、7行目の「と、そう云ってから」以外は雪子の見合いの世話をしている井谷の発話で、発話対象は貞之助である。ここに「……………」(リーダー)が用いられるが、先の「2-3 地の文に見られる発話を表す用法」にあげた「——」(ダッシュ)の用法とは違い、この「……………」(リーダー)には雪子と見合い相手である瀬越とを次も合わせるように、いかにして話し始めようかという井谷の心理が表れているであろう。このような地の文に見られる「……………」(リーダー)の使用は、発話を表す「——」(ダッシュ)の使用に比べると少なく、数箇所にとどまる。

### 3-2 間隙

「3-1 言いよどみ」では、あえてことばを続けず「間」がある「……………」(リーダー)を「言いよどみ」としたが、「……………」(リーダー)の用法には「間」はあるものの、「言いよどみ」のようになんらかのことばが省略されたものではない例も見られる。それが、次の例である。

(上巻・十七)

「あのなあ、カタリナさん、……………」

「何ですか」

「あのなあ、……………ちょっと、中姉<sup>なかあん</sup>ちゃん云うてほしい。……………うち、どない云うてええか分らへん」

これは、妙子に人形を習っているカタリナに招待され、幸子と妙子と貞之助の3人で、カタリナの家に行った場面であり、なかなか夕食が始まらないので、カタリナに夕食について尋ねようとする妙子の発話から始まる。ここで用いられる「……………」(リーダー)はことばを省略したものではない。ここには、妙子の戸惑いを表すような「間」が表される。このような例を「——」(ダッシュ)の「間」と区別し、「間隙」とする。「——」(ダッシュ)で表される「間」には、わずかながらの「間」と発話者の心境の変化や行動が表されたが、「……………」(リーダー)で表される「間隙」には、発話者の心境の変化や行動は

表されず、「——」（ダッシュ）の「間」よりも、少し長めの「間」が置かれるのではないだろうか。この効果の違いは、佐藤（1982）に述べられる「ダッシュの直線的な緊張感と点線の間断的な余情感」によるものであると考えられる。また、『細雪』内においても発話内の「…………」（リーダー）によって、余情感を表す場面がある。

（下巻・二十五）

その静けさの中であって、その光線の、明るくなったり翳ったりが何回となく繰り返されるのを見ていると、彼女は「時間」というものがあることをも忘れた。

「あんた、…………」

夫も彼女と同じ思いに浸っていたのであろう、隣りのベッドに臥そべって四辺を領する静寂を味わいながら、長い間黙然と天井を睨<sup>にら</sup>んでいたが、今しがた起きて富士の見える窓際の方へ歩いて行ったところなのであった。

「あんた、…………面白いことがあるねんわ、…………、ちょっと、これ見てごらん。…………」

「何やねん」

貞之助が振り返って見ると、幸子はベッドの上に上半身を起して、枕もとの卓上にある、側<sup>がわ</sup>がニッケルで出来ている魔法鑊<sup>まほうびん</sup>の表面を眺めているのであった。

「…………ちょっと、まあここへ来てごらん。…………この表面に映ってるのを見たら、まるでこの部屋が廣大な宮殿みたいに見えますねん」

「へえ、…………どれどれ」

ここで見られる「…………」（リーダー）は、「間」を表すと同時に「静けさ」を表しており、「——」（ダッシュ）では表すことのできない余情感があるといえる。

また地の文にも、静けさのようなものを表す「…………」（リーダー）の使用が見られる。それが、次の水害にあった妙子の説明をする例である。

（中巻・八）

妙子は水面に首だけ出している女史を見ながら、死の運命が寸前に迫った人間の顔はああいうものなんだなと思ったが、自分も今あれと同じ顔をし

ていることがよく分っていた。そしてまた、人間は、もうどうしても助からない、もう死ぬのだという時になると、案外落ち着いて、<sup>こわ</sup>恐くも何ともなくなるものであることも分った。……

この「……」(リーダー)には、死を覚悟した妙子の、一種の「静けさ」のようなものが表れている。

### 3-3 無言

先にあげた「……」(リーダー)の「言いよどみ」や「間隙」の用法は、「——」(ダッシュ)の「言いさし」や「間」の用法と類似する部分も見られた。しかし、「……」(リーダー)の中には「——」(ダッシュ)には見られない用法があり、それが「無言」である。本稿で示す「無言」とは、「ことばを発しないこと」である。『細雪』内では、そのような用法の「——」(ダッシュ)は見られなかったが、「……」(リーダー)には次のような例が見られた。

(上巻・二十二)

雪子はさっき、玄関に叔母の声が聞えた時から姿が見えないのであるが、多分二階の部屋へ逃げ込んで小さくなっているのではろうと、幸子は察して、上って行ってみると、果して六畳の居間の、悦子の寝台に腰かけたまま<sup>うつむ</sup>俯向いて考え込んでいる<sup>すだれご</sup>様子が、簾越しに見えた。

「とうとう叔母ちゃんが来やはってんわ」

「……」

「どないする、雪子ちゃん、——」

これは、幸子と雪子の会話であり、雪子が「……」(リーダー)を用いている。幸子の発話は「とうとう叔母ちゃんが来やはってんわ。どないする、雪子ちゃん、——」と、一文で表すことも可能であるが、雪子が幸子に対して相槌や返答もなく「無言」であるということを示すために、雪子の発話として「……」(リーダー)が用いられるのである。このように、発話者が「無言」であることを会話の流れで示す場合には「……」(リーダー)が用いられ、そこには発話者の「無言」という意思表示が読み取られることとなる。

この使用について、四姉妹においては、幸子は鉤括弧で括られた発話内に、



一度も「無言」を表す「……………」(リーダー)を用いていないという結果が表れた。幸子が四姉妹の中で一際発話数が多いことを考えれば、「無言」の例が一例もないことは大きな特徴であり、幸子はどんなにことばに詰まるような場面であっても、「無言」にはならず、必ず何らかのことばを発するということを示す。次に上巻・二十七の、幸子が自分の不注意で流産してしまったことの許しを、貞之助に請う場面をあげる。

(上巻・二十七)

「あんた、堪忍<sup>かんにん</sup>してくれはるわな」

「何が？」

「あたしが不注意やってんわ」

「そんなことがあるもんか。僕はかえって前途に希望が湧いたような気イしているねん」

そう云うとたんに、妻の眼の中にある涙の玉が大きく膨らんで、破れて、頬に伝わる。——

「そうかて、残念やわ。……………」

「もう云わんとき。……………きっとまた出来るよってに。……………」

幸子は貞之助が「もう云わんとき」と言うまでことばを続けるが、幸子の心情を考えれば、悲しみのあまり「無言」になってもよい場面ではないだろうか。それでも幸子が「無言」にならないのは、幸子の特徴といえる。このような特徴が幸子に与えられたのは、『細雪』は幸子が行動し物語が進むからであり、この結果は、吉田精一(1959)や千葉俊二(1995)で述べられる<sup>4</sup>ように、語り手としての役割が幸子に与えられたことを示しているのではないだろうか。

#### 4 四姉妹の使用状況

「3-3 無言」では、幸子が「無言」の「……………」(リーダー)を用いない

4 吉田(1959)では、「作者の眼と心の位置は、二番目の幸子の夫貞之助の近くに置かれているが、幸子もまたその意味で作者の分身として、むしろ「語り手」の位置を保っている」と述べられ、千葉(1995)では、「『細雪』は、幸子、あるいはその夫の貞之助を多く視点人物としながら、その背後には黒衣のようにこの物語を統括する語り手が存在する」と述べられる。

という特徴をあげたが、ここでこれまでにあげた「——」（ダッシュ）と「…………」（リーダー）の四姉妹の発話における使用状況を表にまとめる。集計を行った四姉妹の発話は、地の文とは別に改行され鉤括弧で括られたものを扱った。その数は、鶴子51・幸子816・雪子244・妙子361である。この中で、鶴子の発話が著しく少ないが、これは鶴子の登場回数の少なさが影響していると考えられる。使用数は表1<sup>5</sup>、その割合を図1で示す<sup>6</sup>。

表1 使用数

	「——」（ダッシュ）		「…………」（リーダー）			合計	発話数	発話数との割合
	言いさし	間	言いよどみ	間隙	無言			
鶴子	8	6	5	4	3	26	51	50.0%
幸子	95	61	65	105	0	326	816	40.0%
雪子	19	11	21	30	9	90	244	40.2%
妙子	49	18	8	36	5	116	361	32.1%

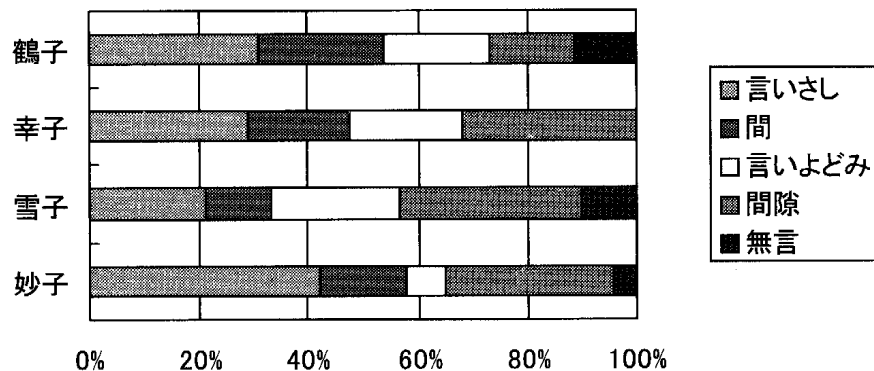


図1 「…………」（リーダー）と「——」（ダッシュ）の割合

表1に示した発話数と「…………」（リーダー）と「——」（ダッシュ）を合わせた記号の割合を見ると、四姉妹の発話の中にいかに記号が多いかということが分かる。これが、四姉妹の大きな特徴といえ、前田久徳（2002）に述べられるように「蒔岡家が世間から別の空間を形成している」ような印象を与える。また、鶴子は四姉妹の中でも最もその使用の割合が大きいですが、これは「昔の箱入娘の純な気質を、今もそのまま持っているところがある」（上巻・二十一）

5 上巻・十五の幸子の発話に見られる歌の合間に見られる「…………」（リーダー）は、他の姉妹にそのような例がないため使用数に含めない。

6 割合は小数点第2位を四捨五入する。

表れなのかもしれない。一方、妙子は四姉妹の中でも最も使用の割合が小さく、これは中巻・二十四に示されるように「妙子が四人の姉妹たちの中で一人そういう変り種になったことについては、もっともな理由もあるので、当人を責めるのは無理なところもないではなかった。なぜかといって、四人のうちで末っ子の彼女一人だけは、亡き父親の全盛時代の恩恵を、十分には受けていないのであった」というような気質の差の表れともいえよう。

図1を見ると、四姉妹の中でも鶴子は「間隙」が少ないこと、幸子は「無言」の使用がないこと、雪子は「間」が少なく「言いよどみ」が多いこと、妙子は「言いさし」が多く「言いよどみ」が少ないことなどが窺える。雪子と妙子は作品内でもしばしば対照的な人物として描かれるが、その差が「言いよどみ」に出たといえよう。雪子は「平素から言葉数の少ない、引っ込み思案」(中巻・十四)であるため言いよどむことが自然と多くなり、妙子は「現代式にチャッカリして」(上巻・十六)おり、「四人の姉妹のうちで、一人だけ挙措進退がはっきりしていて、よく云えば近代的」(中巻・二十四)であるため言いよどむようなことは少なくなるのであろう。

### おわりに

本稿では『細雪』の表現として、発話に見られる「——」(ダッシュ)と「……………」(リーダー)の用法について、四姉妹の発話を中心に考察を進めた。

発話文に見られる「——」(ダッシュ)の用法としては、「言いさし」「間」があげられた。地の文では、登場人物の発話や歌、手紙を引用する例が見られ、それらを表すためにも「——」(ダッシュ)が用いられていた。また、地の文に含まれる発話部分には、ことばなどの「説明や言いかえ」を表す「——」(ダッシュ)の用法が見られたが、この用法は地の文にのみ見られ、鉤括弧で括られ地の文とは別に改行された発話部分には見られない用法であった。

発話文に見られる「……………」(リーダー)の用法としては、「言いよどみ」「間隙」「無言」があげられた。地の文に含まれる発話にも「言いよどみ」の例が見られるが、地の文に見られる、発話文であることを表すための「——」(ダッシュ)とは、そこに発話対象への「配慮」という発話者の心理が表れて

いる点で異なると考える。「間隙」を表す「……………」(リーダー)には、発話者の戸惑いなどが表され、それらには「——」(ダッシュ)の「間」よりも長い「間」が置かれるといえる。これらの違いは、佐藤(1982)で述べられる「ダッシュの直線的な緊張感と点線の間断的な余情感」によるものであり、「間隙」と分類することのできる「……………」(リーダー)には、一種の「静けさ」というものが表されよう。「——」(ダッシュ)にはない「……………」(リーダー)のみの用法としては、「無言」があげられる。

四姉妹の使用状況を確認すると、いかに『細雪』内に記号が多いかということが分かる。蓮實重彦・小森陽一(1993)では、谷崎の晩年の作品について「印刷術の、あるいはタイポグラフィックなものが目につく小説を意図したのではないか。事実「……」とか「——」とかカタカナに傍線がほどこされるとか、あんなにそれがなまなましく見えている作品はない」と述べられる。

四姉妹の特徴としては、鶴子は「間隙」が少ないこと、幸子は「無言」がないこと、雪子は「間」が少なく「言いよどみ」が多いこと、妙子は「言いさし」が多く「言いよどみ」が少ないことがその使用数から窺われる。また、幸子はどんなにことばに詰まるような場面であっても、「無言」にはならず、必ず何らかのことばを発するという特徴も見られた。

以上、本稿では四姉妹の発話を中心に、『細雪』の発話に見られる「——」(ダッシュ)と「……………」(リーダー)の用法をあげた。これらの用法は、四姉妹を除く全ての登場人物に精通するものであると考えられるが、登場人物によってはその性格により、それぞれの用法の頻度に違いがあると予想される。例えば、四姉妹の側でテキパキと働く井谷の発話には「……………」(リーダー)の使用が少ない。

また「……………」(リーダー)の用法として、「静けさ」を表す「……………」(リーダー)が地の文にも見られると述べたが、「3-3 無言」であげた上巻・二十七の地の文に見られる「——」(ダッシュ)との差も今後の課題となる。この場面においていえば、涙が頬を伝わる様を「——」(ダッシュ)で表していると考えられ、「——」(ダッシュ)は「動」、……………」(リーダー)は「静」といえるかもしれない。これらを含む地の文に見られる「——」(ダッシュ)と「……………」(リーダー)の使用については、この後別稿で述べたい。

## 付記

本稿を書き上げるにあたって、指導教授の小谷博泰先生には多大なる御指導・御鞭撻を賜り、木股知史先生からも御教示を賜った。両先生に、深甚なる謝意を表す。

## 参考文献

- 太田紘子編『二葉亭四迷『あひゞき』の表記研究と本文・索引』和泉書院 1997
- 樺島忠夫「表記規則にどのようなものがあるか」『国語国文46(5)』中央図書出版 1977
- 『日本語のスタイルブック』大修館 1990 新装版(1979初版)
- 鷺只雄「中島敦の表現—オノマトペを中心に—」『日本語学6(11)』明治書院 1987
- 佐藤嗣男「芥川の新しい文体—ダッシュと点線の用法に即して—」『表現研究36』表現学会 1982
- 杉本つとむ「句読点・記号の用法と近代文学」『国文学研究35』早稲田大学国文学会 1967
- 千葉俊二「谷崎潤一郎」『スタイルの文学史』東京堂出版 1995
- 寺田透「谷崎潤一郎の文体」『近代文学鑑賞講座 第九巻 谷崎潤一郎』角川書店 1959
- 中島国彦「檸檬」『国文学 解釈と教材の研究19(7)』学燈社 1974
- 蓮實重彦・小森陽一「[対談] 谷崎礼讚—闘争するディスクール」『国文学 解釈と教材の研究38(14)』学燈社 1993
- 前田久徳「『細雪』の変容」『谷崎潤一郎必携』学燈社 2002
- 増田修「感性を掘り起こす」『<新しい作品論>へ、<新しい教材論>へ3』さつき書院 1999
- 吉田精一「本文および作品鑑賞」『近代文学鑑賞講座 第9巻 谷崎潤一郎』角川書店 1959